萬年甫・岩田誠編訳
『神経学の源流3　ブロカ』

萬年甫博士の神経学源流シリーズは、第一冊目「ババンスキー」が一九六八年に、第二冊目「ラモニ・カハール」が翌年の一九六九年に出版された。今回、これら二冊の増刷出版と同時に、第三冊目の「ブロカ」が新しく出版され、これで古典紹介三部作が出揃ったことになる。「ブロカ」のみ岩田誠博士との共著となっている。

ピエール・ポール・ブロカ（一八二四―一八八〇）の名前は、運動失語をブロカ失語と呼び、その言語中枢をブロカ中枢と呼ぶことでよく知られており、彼がこの言語中枢を発見するに至った経過、ダックスとのプライオリティ論争、さらに彼は非常に幅広いすぐれた科学者で興味ある人物で有名であるが、彼についてモノグラフの形で出版されたのは今までにFrancis Schillerの「Paul Broca」（一九七九）のみにすぎない。

本書「ブロカ」は、第一章　ブロカの生涯、第二章　ブロカの業績、第三章　ブロカと現代よりなり、一読してあらためて古典の重みを感じさせられた。

第一章ではブロカの生い立ちから家庭、研究生活などが興味深く述べられている。一八五〇年病院外科医のコンクールに失敗し、人生で初めての挫折感を味わったが、五三年には奮起して病院外科医と教授資格試験に優秀な成績で合格している。このように彼は外科を志望していたが、彼に割りあてられたのは、パリからやや離れた精神病患者の多いビセートル病院であった。恐らく彼は非常に不満であったろうが、挫折と不満が人間を成長させるというのは彼についても言えよう。後にビセートル病院での経験が重要な意味を持つことを当時の彼は想像もしなかったであろう。

第二章は彼の主論文の邦訳と、それらの解説にあてられている。特に彼が言語中枢を発見するに至る過程は、フランツ・ガルに始まる骨相学、さらに当時の医学界の考え方など広い視野から論じられている。「下手な推理小説を読むよりはるかに興奮する」という故中田瑞穂博士の言葉も引用されており、本書の圧巻である。つい引き込まれてしまう。ダックスとのプライオリティ論争についても詳しい。プライオリティ論争となると人は往々自制を失い、一見冷静な科学者の人間的な側面が如実に現われてくる。そこに見られる人間ドラマは、小説以上に魅力的である。言語中枢は、ベル・マジャンディーの法則と並んで過去のプライオリティ論争の双璧であろうが、プライオリティの持つ魔力をあらためて感じさせられる。

さらに保存されているブロカの患者の脳をめぐって、はたしてブロカ領域に相当する部位が侵されているかどうかについてのマリーとデジェリンヌの論争も興味深い。「人は自分の見たい面からのみものを見るのである」ことを再認識させられた。ブロカの論文をはじめとして、古典として再読に値するものはいずれも単独執筆である。最近の論文は著者の数がやたらに多く、十名以上のものもある。そのために誰の思想

もそこには含まれていない。味気なさを感じているのは筆者だけであろうか。

第三章は、ブロカ中枢の今日的意義について論じられている。最近はCT、MRI、PETなどにより、生存中に患者の脳の局在機能を画像で把握することが可能となった。ブロカの時代には想像もできなかったことである。ところでブロカ中枢は左前頭葉にある。右前頭葉の同部は一体何をしているのであろうか。これは筆者の年来の疑問である。

最後のブロカの業績一覧は完備していて、幅広い専門家である彼の側面がうかがえる。デュシェンヌに先がけてデュシェンヌ型筋ジストロフィーの報告（一八五一）をしているあまり知られていない論文もある。「肉眼で判らないことは顕微鏡で見てもなかなか判らない」など、本書は単にブロカの紹介だけでなく、著者の思想がにじみでていて面白い。

本書は前二書と同様、読む人それぞれに新しい問題点をみつけるヒントを与えてくれよう。

（古川　哲雄）

〔東京大学出版会・東京都文京区本郷七―三―一東大構内、電話〇三―三八一一―八八一四、一九九二年五月刊、A五判、三〇三頁、五一五〇円（税とも）〕

和田耕作著『安藤昌益と三浦梅園』

『安藤昌益と三浦梅園』という、江戸末期、ともにほぼ同じ時代を生きた、独創的な哲学・思想家についての記述である。この両者の思想的内容は余りにも深奥なものがあり、充分書評となっているか危惧しているが筆者にとっても興味をもっている人物である。

本書の内容は、Ⅰ、安藤昌益と現代、Ⅱ、陶淵明と安藤昌益、Ⅲ、三浦梅園の医学思想、Ⅳ、贋作の証明、Ⅴ、思想史研究余話となっているが、書評としての性質上、主にⅠ―Ⅳを中心とした。

彼等が生きた時代は、これより先きに我が国の医学は『黄帝内経』を思想の中心にすえた後世方医学から、儒学の洗礼を受け、『傷寒論』をより処とした『古方医学』に変換していた頃である。著者は昌益は「気の医学」を通じて『黄帝内経』にその基をおいているという。彼の提唱した、一元気論は確かに『内経』的な側面を有しているが、古方医学に対するほどではないにしろ、「此の書をもって黄帝岐伯問答の医書となし、聖知を以て民の病苦を慈んで医法を始むと云ること偏りなり」（稿・自・四）、「三部九候」「三陰陽」「十二府臓経絡」など三言の制法を放妄の医論といい（刊・自・序）、さらに運気論など十干十二支によるものは「皆な十二言を以て運気病論治す。故に皆な失れり」（統・人倫巻）ともいっていることを付加しておく。

彼の生涯は最近おぼろげながらその全貌をあらわして来ている。その主張の中心は土であり「直耕の人」―農民こそが至上のものであり、その理想社会は「万人が直耕する社会」